

思い残していたこと

～井上ひさしと藤沢周平

宮城野区文化センター

村上 佳子



2011年3月11日の東日本大震災から10年の節目が近づく昨今、あの3月に出かけるはずだった二つの場所を思い出します。ひとつは井上ひさしの芝居「日本人のへそ」、もうひとつは「藤沢周平記念館」です。

「日本人のへそ」は仙台文学館初代館長を務めた井上ひさしが劇作家として本格的にデビューした作品です。初演は1969年、作者が35歳の時で、その才能あふれる作家の登場に演劇関係者は大きな衝撃を受けたといえます。

井上ひさしは震災の前年2010年4月に肺がんにより亡くなりますが、その直後から次々と追悼公演が行われ、この「日本人のへそ」が1年間の追悼シリーズをしめくくる舞台でした。私は3月16日のチケットを予約していましたが、あの震災のため東京での観劇は全くかなわない状況となりました。

1969年の初演から大好評を博し、1972年、1985年、1992年と再演されてきましたが、私は観る機会が無く、とても楽しみにしていた作品ただけに今でも残念に思います。震災直後の当時は東京での公演も危ぶまれましたが、主催者はこんな時こそ幕を開けなければと、上演にふみきったといえます。

舞台は、東北の片田舎から集団就職で上京し、クリーニング屋の住み込みから流れ流れてストリッパーとなるヘレン天津の一代記に、吃音症治療のための劇中劇が入れ込まれて展開していきます。初演の舞台稽古を見た作者自身が「芝居というものがこんなおもしろいものならば、少し本腰を入れてやってみようか、と決心した」と伝えられる作品で、井上芝居の原点ともいえます。

この度のエッセイを書くにあたり改めてその資料を読み、次の上演機会への期待をつなげています。



「日本人のへそ」公演チラシ

「藤沢周平記念館」は2010年4月、作家の出身地である山形県鶴岡市に建てられました。仙台文学館では2006年の秋に「藤沢周平の世界展」を開催していますので、当時勤務していた私も藤沢作品に親しみ、その年の『大地』にも紹介させていただきました。

開館翌年の2011年3月下旬に数人の仲間と鶴岡訪問の計画を立て楽しみにしていましたが、やはり震災により実現することはできませんでした。その後はなかなか機会を持てずにいましたが、昨年の暮れに出かけてみることにしました。

仙台から高速バスで2時間半、鶴岡市内で路線バスに乗り継ぎ鶴岡公園に向かいます。鶴ヶ岡城があった城址公園は、

緑豊かな自然にかこまれ桜の名所としても知られていますが、時折雨が落ちる12月の平日は静かなたたずまいを呈していました。

記念館は鶴岡市役所にほど近い公園内の一角に、みどりに囲まれて端正な姿を見せていました。藤沢周平の一人娘で記念館の監修者である遠藤展子さんの意向は、「質素で小さな施設を」とのことで、規模はこじんまりとしていますが機能性とともな誠実さと温かさが感じられる建物でした。展子さんには2006年の展示の際にお目にかかり、仙台にも足を運んでいただきました。気さくなお人柄の中に、父・藤沢周平を愛しその文学を大切に守っていきたいとの思いを持っておいででした。

記念館の展示では、「蝉しぐれ」「たそがれ清兵衛」「橋ものがたり」など数々の時代小説が広く愛読され、1997年69歳で亡くなった藤沢周平の生涯と作品世界が丁寧に紹介されています。

入館パンフレットに記された「生まれ育った土地の風景が、いまも私の中に生きつづけている」との言葉のとおり、藤沢作品に描かれる鶴岡・庄内の原風景が立ち現れるような展示室でした。特に、導入部の「藤沢文学と鶴岡・庄内」のコーナーでは、この地方の四季折々の風景が3方向に映し出され、場面が変わっていく映像に載せて小説の一節が紹介される印象深いものでした。その場面のひとつに「三津屋清左衛門残実録」に登場する郷土料理もあり、寒ダラのどんがら汁、ハタハタの湯上げ、焼いたクチボソ（マガレイ）など、かつて藤沢周平自身が好み、今もこの地方で日常の食卓にのぼる料理の映像を楽しむことができました。



藤沢周平記念館

記念館を出てしばし散策した鶴岡公園内には広い堀があり、その水辺に「水の食卓 百けん濠」という素敵なレストランがありました。ちょうどランチタイムでしたので、旬のハタハタ焼きと名物の麦切りをいただいて、藤沢文学の余韻とともに湯浜温泉に向かうことにしました。